

22 (語り) お地蔵さん(お地蔵さん)

むかしのころに、ひいらぎの樹の下で、ある晩、人の家へとるほじはいつて、ぬすみだしてきた金を、お寺の村のじいさんが見つけた。森のなかにある、お地蔵さんの下に、かくして、

かくして、かくして、ひいらぎの樹の下で、ある晩、人の家へとるほじはいつて、ぬすみだしてきた金を、お寺の村のじいさんが見つけた。森のなかにある、お地蔵さんの下に、かくして、

「だれにも、かくしたことを、しゃべらなよ。」

と、

お地蔵さん、

「わがはしゃべらなよ、お寺のじいさん、と、



ものなまじりはすのなひ、お地蔵さんの「えが、たしかにはつまつまじりてきたので、ぬすつとはは味がわるくなり、いそいでその場をたちやうた。

家へかえってねたが、お地蔵さんのことが気になって、どうしてもねむられなかった。

どうして一晩まんじりともしないぞ、夜のめけるのをまつと、いそいでぬすんだ家へいって、自分のしたことを白状した。

なんだが、そういふにはいられなかったのよめめ。

そしてその家の人といつねだつて、金のかくしておいたお地蔵さんのところへきて、そつとお地蔵さんの顔をみるよ、お地蔵さんは、いじものやみして、いじりたせつて顔をしていたので、ぬすつとははつと女心した。

そんなことがあつてからぬすつとはは、びたりとぬすつとはをぢめて、つてもまじめな人間になつたといふことであめ。

